

三村山極楽寺跡（茨城県つくば市）出土の塑像片について

吉澤 悟

はじめに

本稿は辰馬考古資料館（兵庫県西宮市）に保管されている三村山極楽寺跡出土の塑像片を紹介するものである。三村山極楽寺（以下、極楽寺）は、筑波山の南麓に営まれた中世寺院で、鎌倉時代の弱者救済で有名な忍性が十年間止住し、西大寺流律宗の東国屈指の拠点となったことで知られている。昭和二十七年（一九五二）、この極楽寺跡の一面で瓦窯の発掘調査が行われ、同時に若干の塑像片も発見された。しかし、その後、瓦に関する二、三の論考は発表されたものの、塑像片について報告されたものはなく、その存在さえ知られていない状態であった。中世寺院に置かれた塑像の実例として看過するには惜しい資料であり、さらには忍性を中心とした律宗教団の活動を知らずとも重要な資料である。実見が叶ったのを機に詳細をここに報告する次第である。

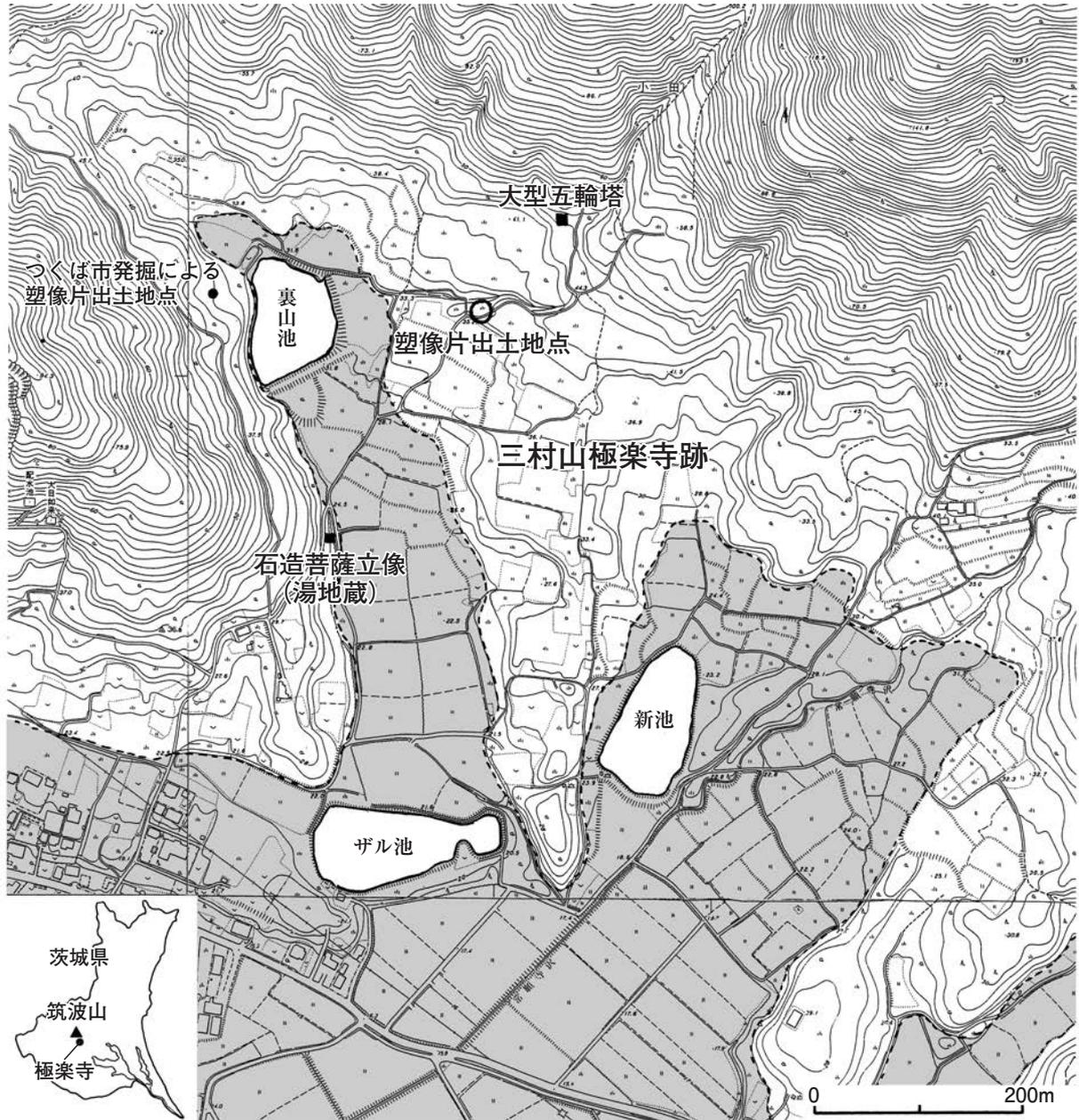
一、三村山極楽寺の立地と歴史

筑波山は関東平野の北東・鬼門に位置する。山頂に男体山と女体山が並ぶ麗姿は、古来より信仰の対象とされ、数多くの万葉歌が残

る聖地でもあった。極楽寺はその筑波の山なみの南端、宝篋山（標高四六一m）のふもとに営まれた。山を背にし、両脇も丘陵に囲まれた緩い谷地で、南方眼下には、霞ヶ浦に注ぐ桜川が開析した肥沃な平地が広がっている。現在、旧寺域のほぼすべてが水田となっており、かつての伽藍がどのような配置であったのかは全く分からない。ただし、谷の中央に細長い舌状の微高地があり、そこに山門から金堂や講堂、諸堂諸院などが縦列し、さらには左右の奥まった高台に尼寺や別院が展開していたような景観が想像される（図1）。

極楽寺は、もとはその寺名が示すように浄土系の寺院であったと思われるが、創建時期は定かではない。鎌倉時代初期、幕府の重臣であり後の小田氏の祖となる八田知家が三村郷¹を治め、極楽寺を建立し菩提寺としたと考えられている。実際、極楽寺跡から発見される最初期の瓦（均整唐草文軒平瓦）は、寺の南西至近にある小田城本丸出土の瓦に同範のものが²あり、さらには鎌倉永福寺の創建期の軒平瓦とも同範関係にあるという（比毛ほか二〇二三）。よって、規模は不明ながらも十三世紀初頭頃には極楽寺は建立されていたと考えられる。

忍性が極楽寺に入ったのはその半世紀後、建長四年（一二五二）二月のことであった（『性公大徳譜』）。当時、常陸国守護であった小



(アミかけは低地水田面)



三村山極楽寺跡遠景



塑像片出土地点付近 (道の左端の微高地)

図1 三村山極楽寺跡の立地と現況



図2 大型五輪塔と石造地藏菩薩立像

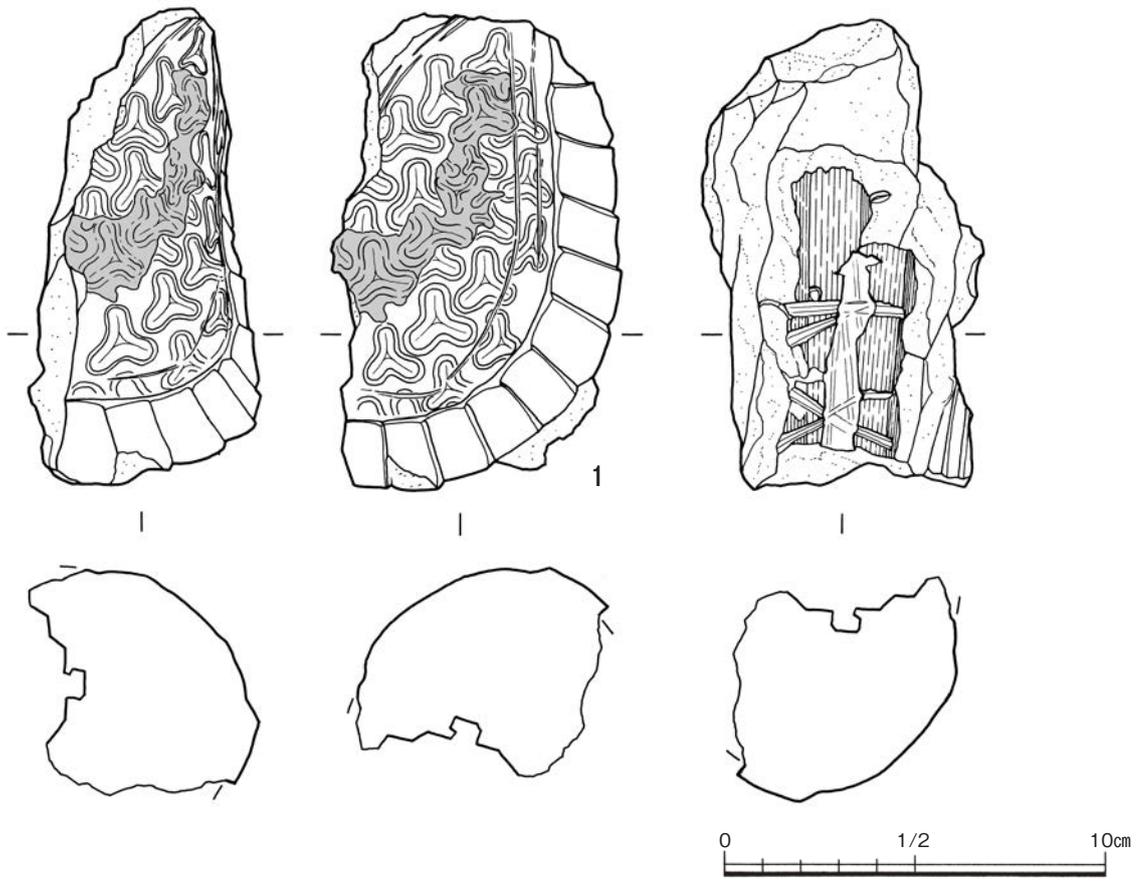
田時知(小田氏四代)の招請を受けてのことと思われ、早くも翌年には建長五年(一二五三)銘の「三村山 不殺生界」と刻んだ結果石を設置し、戒律護持の律寺経営を進め、さらに翌建長六年(一二五四)には忍性自身が戒和上となり、弟子たちに具足戒を授けるなど活動を拡充している(『性公大徳譜』、松尾二〇〇四)。また、極楽寺跡からは「正嘉二」(一二五八)銘の文字瓦が出土しており、忍性止住期には伽藍の整備も着実に進展していたようである。弘長元年(一二六一)、忍性は極楽寺を離れて鎌倉に向かうが、その後も同じく西大寺叡尊の弟子であった頼玄らによりさらなる発展を遂げている(『本朝高僧伝』海竜王寺見空伝ほか)。境内西端に立つ正応二年(一二八九)銘の石造地藏菩薩立像(湯地藏)はこの発展に関わるものであり(図2右)、また正和三年(一二三四)銘の文字瓦の出土からも忍性以降の伽藍整備の様子が見えてくる。考古学的にも十三世紀後葉から十四世紀

前葉にかけての極楽寺の瓦は、最もバリエーションが豊富であり、技術的に高いことが指摘されている(比毛ほか前掲)。まさに「常州三村山は坂東の律院の根本本寺也」(『雑談集』、嘉元三年(一二三〇)成立)と称されるまでに発展していたのである。その後、天正年間の初め、小田城の落城と共に極楽寺も衰退したとみられ、江戸時代には僅かに清涼院が残り、忍性を偲ぶ遺

構として記録に残されている(『本朝高僧伝』忍性伝)。

二、塑像片について

極楽寺跡では古くから古瓦が拾われており、すでに江戸時代には「三村山」「清涼院」などの文字瓦の存在が知られていた(茨城県つくば市教育委員会一九九三)。昭和二十七年(一九五二)八月、茨城県下で長く教鞭を執り、新治郡衛をはじめ県下の遺跡調査でも活躍していた高井悌三郎氏は、地元藤田清氏、中村盛吉氏らと協力して瓦片の集中地点を発掘し、瓦窯の遺構と共に、その後の瓦編年の基準となる軒丸・軒平瓦や「正嘉二」(一二五八)銘平瓦などを発見した。その概況は『日本考古学年報5 昭和二十七年度』をはじめ、昭和三十年以降、高井氏らによって各誌で発表されているが(高井一九五七、一九六四、一九七九、藤田一九七二)、正式な報告書が未完のため、ここで問題とする塑像片については僅かな記述があるのみである。高井氏は「ここで採取された遺物はもちろん古瓦を主とするが、他に華瓶、塑像残欠、青磁片をふくむ」と記し(高井一九六四)、また藤田氏は「土製仏像らしいものの小断片、土器片などが出土した」と報じた(藤田一九七二)のが塑像片に関するすべてである。瓦窯が発掘された当時、すでに高井氏は茨城県から転出し、兵庫県西宮市の甲陽学院中学・高校の教員になっていた⁽²⁾。報告書をまとめるためか塑像片を含む遺物の一部は甲陽学院高校の歴史研究室に運ばれており、最終的には辰馬考古資料館で保管されることになった。報告書の未完に加えて、地元茨城県から離れ置かれたことも塑像片が日の目を見なかった一因と言えよう。



表面



裏面

图3 塑像片1 实测图

さて、塑像片の出土した場所であるが、高井氏らによる瓦窯跡の調査地点は、旧寺域の中心となる舌状微高地の付け根付近、現在「忍性記念 極楽寺公園」とされている場所である(図1の○印。つくば市小田字尼寺入四二〇八)。その北側には一段高い平坦地があり、極楽寺の中でも重要な堂宇が建っていたと想像される。そこから少し山道を登ると3m近い大型五輪塔(頼玄墓塔とみられる、図2左)が建つ区画に行き当たるので、この平坦地には奥の院ないし塔頭のな性格を帯びた子院が存在したのかもしれない。以下に紹介する塑像片は、そこに安置されていた尊像が堂宇の火災によって断片となり、かつて瓦窯が築かれた下段部に流れ落ちたものと思われる。

辰馬考古資料館に保管されていた塑像片は全部で九点である。焼けた土壁片や土師器、青磁片、かわらけ類とも一緒にテン箱一つに納めて保管されており、特に土壁片には塑像片との判別が難しいものもある。伴出品としてそれらも精査・検討すべきところであるが、今回はまず抽出した塑像片のみを詳しく紹介することにした。

塑像片1〔甲の裾〕(図3)

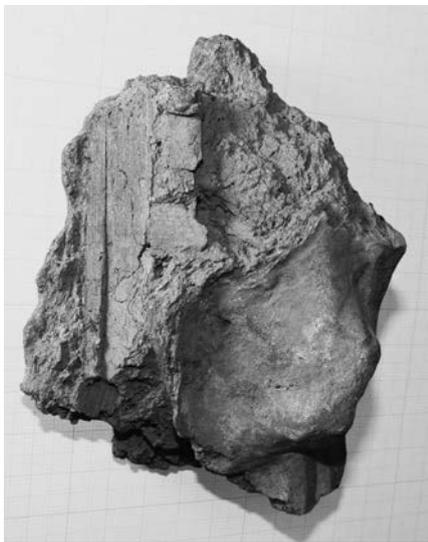
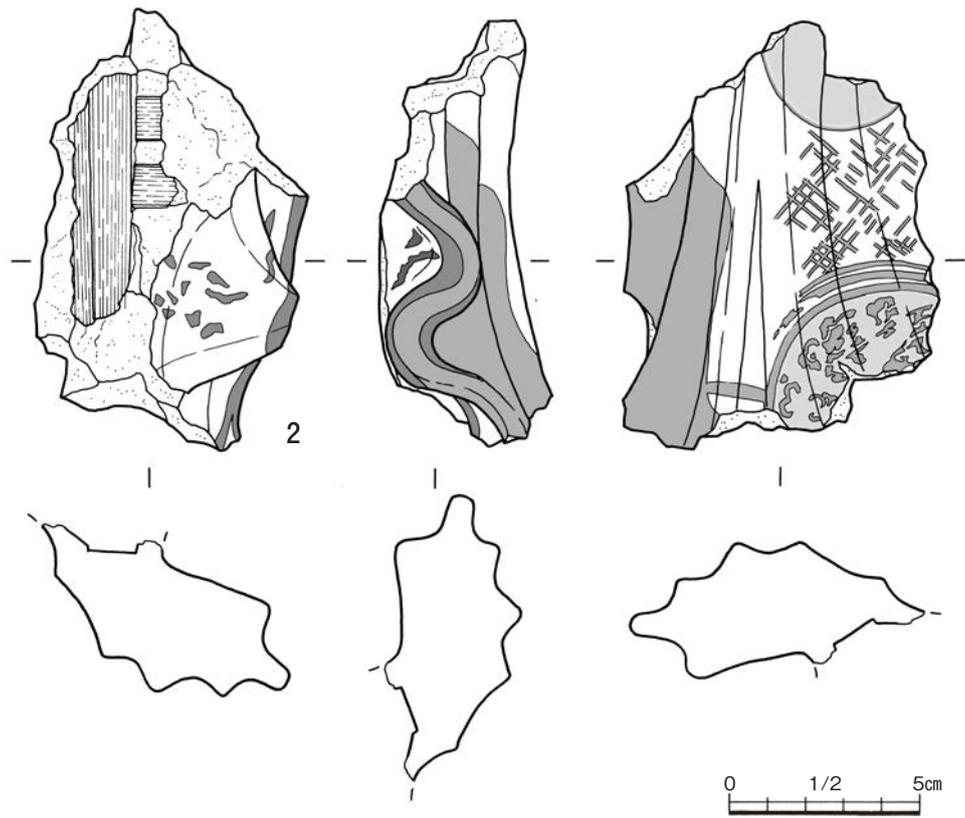
縦一二・八cm、横七・三cm、厚五・八cm

最も大きな破片で、表面に三叉のスタンプ文と襷の表現、裏面には芯材の跡が良く残っている。粘土は芯から表層にかけておおよそ三層に分かれる。芯材の周辺に貼り付けた厚さ二cm程の粘土は、スサを含む粗い粘土で、混入された植物繊維が被熱により炭化粒子となった様子や、粉粒の圧痕もみられる。この粗土の周囲には、像の肉盛りに用いた二番目の粘土がおよそ一〜二cmの厚さで巻かれている。粘土の質はさほど変わらぬ粗さであるが、幾分混ぜ物を少なく

して造形し易くしたように見受けられる。そして表層にはごくキメの細かな精土が四〜五mmの厚さで盛り付けられている。微細な石英粒が含まれる他は目立った粒子は見えず、一般にキラと呼ばれる雲母の混入も見られない。表面に見える細部表現はすべてこの精土で作られており、三叉のスタンプ文がこの土に押されている。本片には上記の三層の粘土に加え、最表面に漆喰のように白い化粧土が厚く塗られている。この化粧土の上にも重ねて三叉のスタンプ文が押されているが、被熱により半分くらいに収縮した部分も見られる。

細部表現に注目するならば、中央から左端にかけて三叉のスタンプ文、下端から右側面にかけては細かな折り目をもつフリル状の襷が表されている。三叉のスタンプ文は、突出部で長さ約一・八cm、上下方向に列を成し、隣の列とは噛み合うように位置をずらして押捺されている。これは後述するように鎖を連ねた甲、「金鎖甲」の表現であろう。スタンプ文が精土と化粧土に二重に押されていた理由は定かでない。仔細を見ると、精土上のスタンプ文は襷に接するまで、あるいは一部は襷の下に潜り込むように押されているが、これは最終的には訂正されたようで、襷から一cm程離れた位置に数条の沈線や剥離痕が見られ、おそらくこの部分に白土で帯状の隆起を設け、甲の縁取りないし金鎖甲の下に着る「裙」(裳裾)の縁を表現したのであろう。襷の部分には彩色が施されていたらしく、現状は一様に灰褐色を呈している。

裏面には芯材の跡が窪みとして明瞭に残っているが、やや複雑な構造である。芯材は一見すると断面六角ないし八角の面取りを施した角材のようであるが、一材では考え難い筋目のくい違いが観察される。おそらく幅二cm弱のへぎ板を数枚束ねて紐で括り、多角形の



裏面



表面



表面文様拡大

図4 塑像片2 実測図

棒状に仕立てたものと思われ、斜め十字にかけた紐の圧痕も見られる。さらにその外側に細い材を一条沿わせていたが、その圧痕を見るかぎり藁かススキを数本束ねたものようである。このような小材を組み合わせる理由は定かではないが、本片が体幹の中心から離れた縁辺の装飾部分であり、その複雑な形状に応じて芯材を付加したのであろう。

塑像片2〔衣〕(図4)

長一・五cm、横八・三cm、厚四・五cm

大きな衣の破片である。表面に縦に三〜四条の襷が付き、側面に波打つ裾の表現が見られる。胎土の大半が塑像片1と同様のスサ混

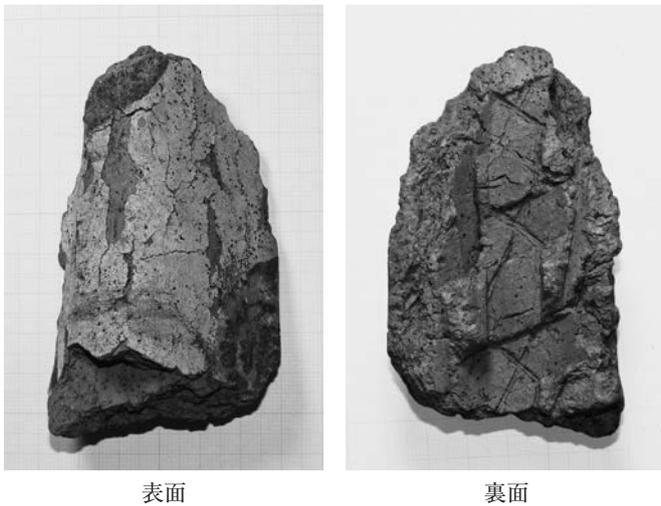
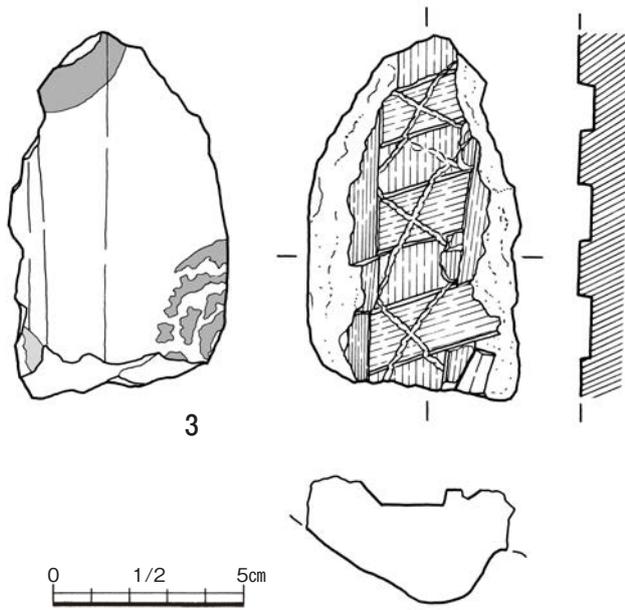


図5 塑像片3 実測図

塑像片3〔衣〕(図5)

縦九・六cm、横五・五cm、厚三・五cm
衣の大きな襷の一部とみられ、断面は

裏面の芯材の圧痕は、幅一・二cmの細長いへぎ板を縦横に組み合わせたものである。縦方向は、断面が台形の角材、もしくは複数の細板を束ねて面取りのある角材のように仕立てたものかもしれない。横方向は、同じ幅の細板を5mm間隔で平行に並べている。縄目痕はみられず固定の方法は分からないが、これらで籠目状の芯材を作り、幅広の衣を支えていたと考えられる。

じりの粗土で、表層約5mmに精土が被せてある。さらに表面にはごく薄く白い化粧土が塗られており、その上に彩色文様が施されているが、今この彩色は被熱によって黒・暗褐色に変色している。本片は形状から、縦方向に垂れ下がりがつつ、横側面に裾のうねりを見せる「裾」の一部であると考えられる。襷の厚みが3cm以上もあるため、一〜二尺の小像よりも大きな像であったことが窺われる。表面に大型の円文(中は花文と思われるが詳細は不明)を散らし、その間地を斜格子文様(被熱により彩色と一緒に化粧土が剥げ落ちていく)で埋めた華やかな意匠である。裏面に見えるうねり部分(「裾」の内側)の彩色は、地を赤色、文様を緑色系の顔料で描いたもののように見受けられる。

三角形を呈する。表面より見て左側面が急角度で下降しているが、その先で再び上昇して大きなうねりを形成していた様子がうかがえる。

胎土は塑像片2と同様で、表面にクリーム色の化粧土がごく薄く塗られており、大型の円花文が彩色で表わされている。ただし、被熱によって彩色の顔料が煮え立ち、黒褐色の固まりと化しているため、文様の形も不明瞭となっている。

全体が焼き締まっているため、裏面に残る芯材の圧痕は極めて明

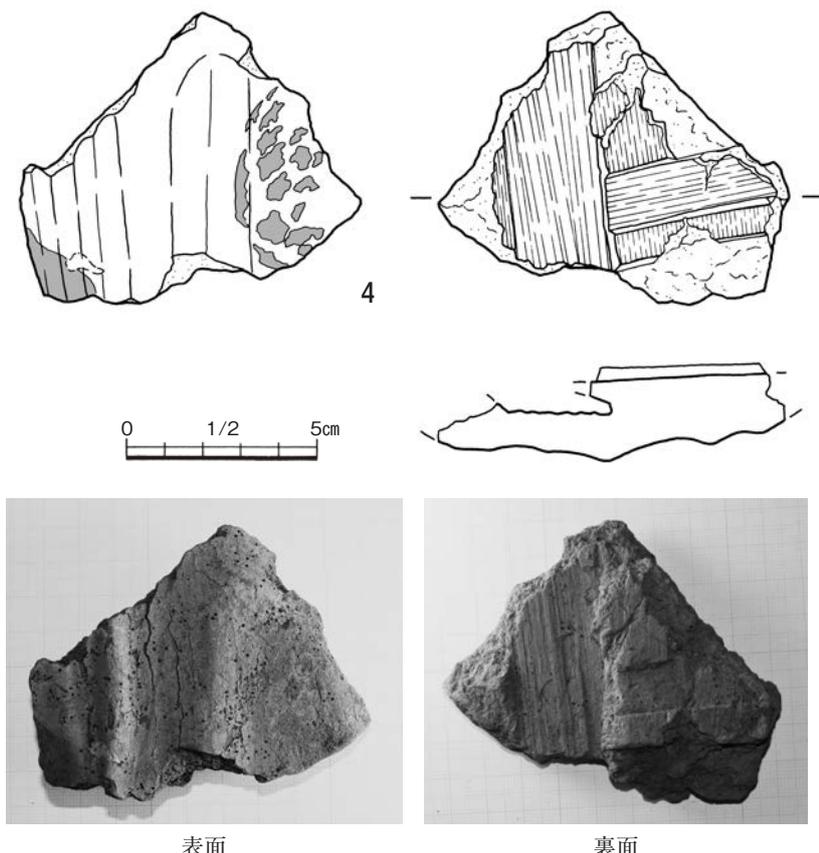


図6 塑像片4 実測図

瞭である。幅約2cmのへぎ板を縦軸とし、これに同寸幅で厚さ三〜四mmの別材を直行させるように横に並べ、紐で斜め十字に縛り付けている。横板の間隔は約一・五cmで、現状では三枚分が確認される。この横板の端は、さらに別の縦板の下にもぐり込んでいたようで、左右の圧痕が分断されている。この様子から、芯材の構造は幅2cm、厚さ三〜四mmのへぎ板を縦横に組み合わせ、籠目状ないし笊状にしたものであったと推定される。およそ塑像片2と同様の芯材とみられ、共に当初は幅広の衣、「裙」を構成していたと考えられる。

塑像片4〔衣〕(図6)

縦七・四cm、横九・〇cm、厚二・五cm

幅広の衣の一部で、表面に縦方向の大小の襷が表わされている。

胎土は塑像片2と近似しており、粗土をベースに表層2mm程に精土が盛られ、表面にはクリーム色の化粧土が薄く塗られている。表面の右端に円花文とみられる彩色の痕跡があるが、被熱により灰褐色の滲みと化している。また左下には別の円花文かと思われる暗赤褐色の彩色も見られる。

裏面は塑像片2、3と同様に、へぎ板を縦横に組み合わせた芯材の痕跡が明瞭に残る。裏面左半分に見える縦軸の芯材は、筋目に乱れがあるため板材ではなく、藁やスキを平たく束ねたものと思われる。これを裏支えするように幅一・二cmの横板や縦板が重層している様子がうかがえる。詳しい構造は分からないが、これも籠目状の芯材の一種であろう。表面に円花文の彩色があることと考え合わせると、本片は塑像片2、3に連なる「裙」の一部と考えるのが妥当である。

塑像片5〔脛〕(図7)

縦六・二cm、横五・二cm、厚五・七cm

円柱状の部材片で、表面には縦に二段突帯、横にそれを締める二条の突帯が表現されている。胎土はスサ混じりの粗土を基礎に、表面三mmにキメの細かい精土を被せ、表面全体に白い化粧土が薄く塗られている。横の突帯の下方に灰褐色を呈する彩色の痕跡があるほか、側面上部にも僅かに赤みを感じる褐色部分が見られる。また、

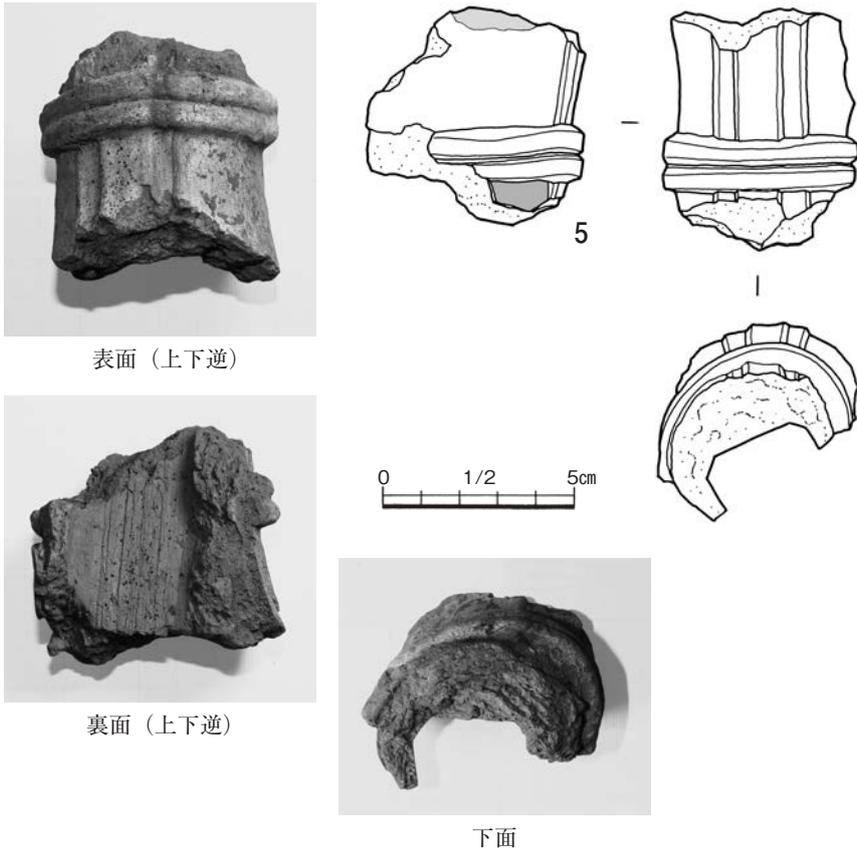


図7 塑像片5 実測図

縦の突帯に沿って黄褐色の筋が見えるが、これは当初の彩色ではなく、被熱の際に鉄分が流下した跡であろう。

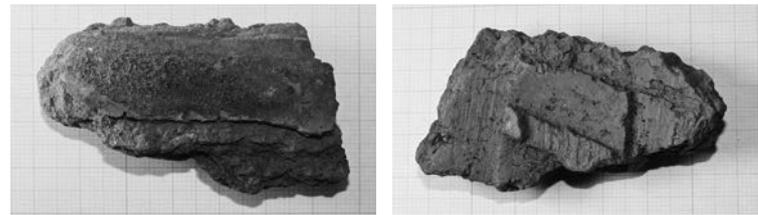
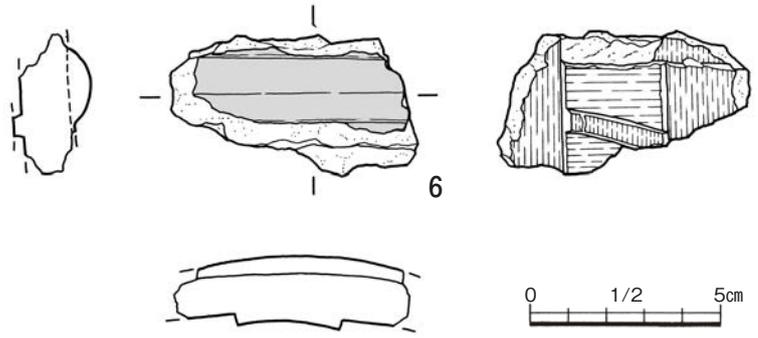
裏面には心木の跡が明瞭に残っている。その圧痕から、角を面取りした幅三cmの角材が心木に使われていたことが判明する。この心木の周囲の肉取りや横の突帯のカーブ等から推計すると、本片は直径約七cmの円柱で、上方に向かってやや広がる形状であったと復元される。像の手首付近もしくは足首から脛にかけての部材と思われるが、縦の二段突帯は脛甲に附属する装飾とみるべきであろう。足首の直径が約七cmとして、現存する天部像の比率に当てはめると、本像はおおよそ一・二mの像高であったと想定される。

塑像片6〔帯〕(図8)

縦三・七cm、横六・七cm、厚二・〇cm

横長の三角形の破片で、表面に膨らみをもった帯状の表現が付く。胎土は他と同様の粗土で、帯状の表現はキメの細かい精土が盛られ、彩色が施されている。今、彩色は黒褐色に変色しており、当初の色は計り知れない。

裏面には縦板と横板が複雑に重なり合う芯材の圧痕がみられる。中央に突出した芯材は、横方向に筋目をもつ板材で、あたかも曲げ物の表面のように緩い曲面をもつ。この横板は五mmの間隔をあけて上下に二枚並んでいる。そして、これに直行させるように縦板を重ねているが、その間隔は約二・五cmである。右上にはこの縦板を縛った紐跡もみられる。これらの状況から、芯材の構造は、横板を緩く曲げて段積みした、ちょうど蒸籠や甑のような曲げ物の筒に、縦板を一定間隔で縛り付けて籠状にしたものと推定される。縦横どち



表面

裏面

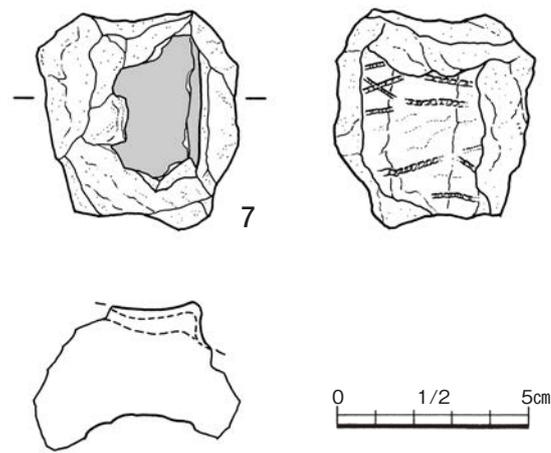
図8 塑像片6 実測図

らの板材も一・五〜二cm以上の幅をもつようであり、上記した衣とみられる塑像片よりも大きめの芯材が使われている。それは本片がより体幹部に近い部位を占めるからと思われ、表面の帯状の表現は、腹部の締め帯に当たると推定される。

塑像片7〔不明〕(図9)

縦五・七cm、横五・五cm、厚四・一cm

裏面に芯材の圧痕があるため、かろうじて塑像片と判断された小片である。他片と同様の粗土を基礎として、表面に二〜七mmの厚さ



表面



裏面

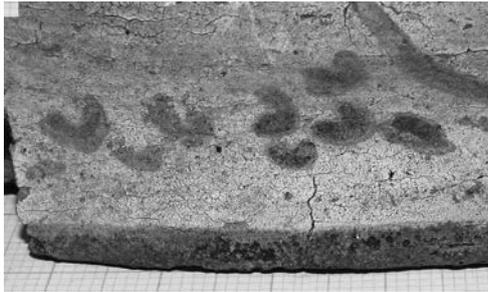
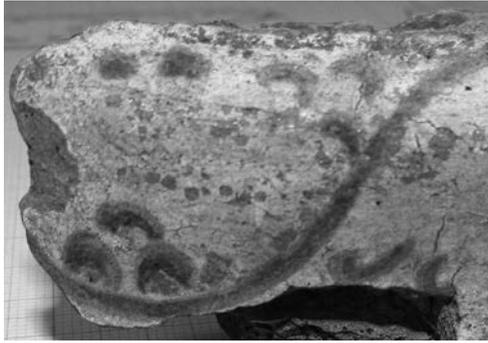
図9 塑像片7 実測図

で精土を盛った部分があり、その上に白い化粧土が薄く塗られている。向かって右側を高く盛り、衣の襷を造形したのかもしれない。化粧土の一部に褐色の変色が見られ、彩色があつた可能性もある。裏面に見える芯材は、幅約二cmのへぎ板を紐で束ねたもの、もしくは面取りをした角材に紐を括り付けたものと思われる。残存状況が悪く、塑像における部位を推定することも難しい状況である。

塑像片8〔台座?〕(図10)

縦三・八cm、横二・二cm、厚三・一cm

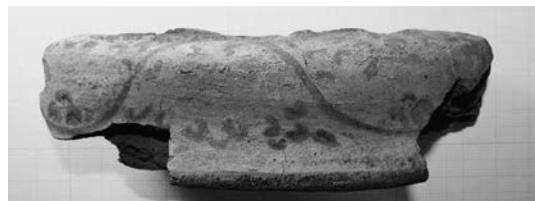
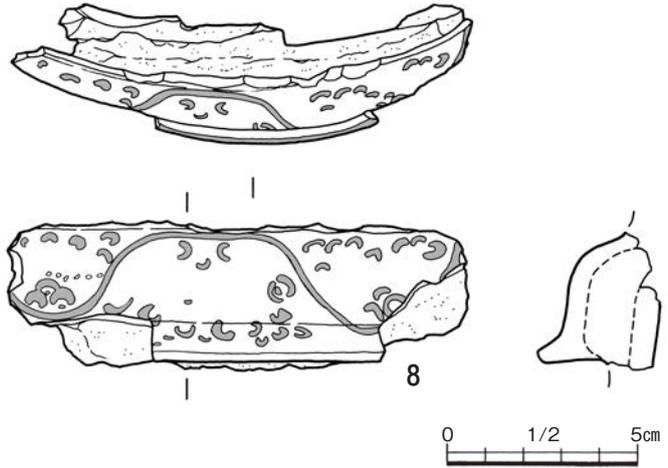
大きな円環形の裾部分であろうか。粗土は二層あり、芯材の圧痕が残る厚さ五mm前後の粘土と、その上に盛り上げた厚さ一cm程の粘土はどちらもキメの粗い粘土である。さらにその上に三〜五mmの厚さで精土を盛って、曲面や庇状の張り出しを造形している。表面に



文様部拡大



裏面



表面



下面

図10 塑像片8 実測図

は白い化粧土を塗り、蔓草や花文を彩色で表している。被熱により彩色はすべて濃淡の褐色に変化しており、文様構成も不明瞭である。C字形の花弁には二〜三段階の濃淡が見られるため、当初は暈縹彩色の華やかな花文であったと推定される。庇状の張り出しの先端にも黒褐色の彩色痕があり、この円環形の部材の縁を一周するように彩色が施されていたのであろう。

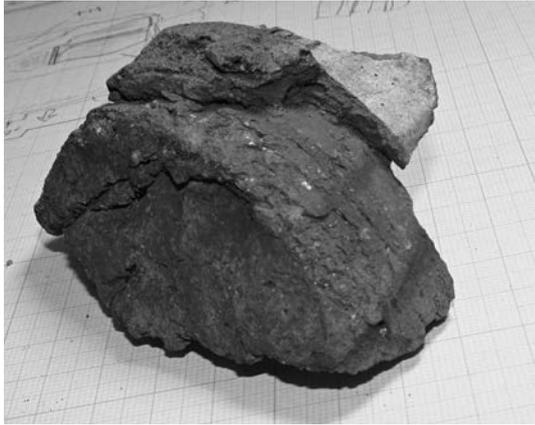
裏面に見る芯材は、おそらく塑像片7と同様の構造であったと思われる。曲げ物状にたわめた横材に一定の間隔を置いて縦板を縛り付けたものと推定される。

本片は全体に緩くカーブしており、もし真円であったならば直径五〇cm以上の円環の縁に相当する。蔓草と花文の華やかな装飾とも併せて、天部像を中心に様々な尊像に該当部分を探したが、適切な部位は見つからなかった。おそらく尊像そのものではなく、台座のような器材の一部と見るのが妥当であろう。

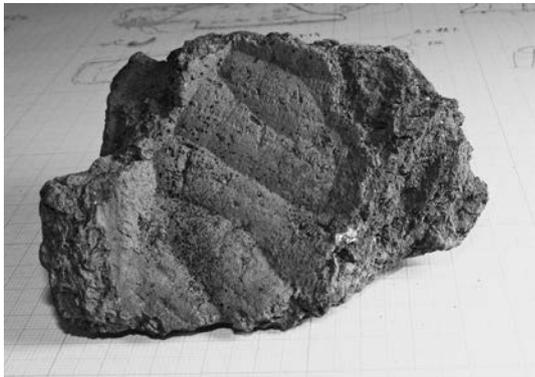
塑像片9〔台座?〕(図11)

縦五・七cm、横九・三cm、厚六・四cm

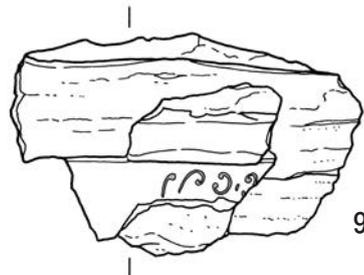
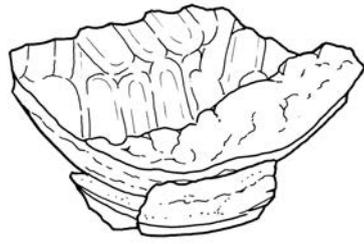
鉢巻状の横突帯をもつ円柱状の大型片である。原形が分からないため、上下方向や角度も判断が難しい。胎土はほぼ全体が粗土で、突帯部分およびその下方に広がる化粧土の下地に精土が張られている。突帯は残存幅一・五cm、厚さ五〜八mmで、当初はもっと幅広く、化粧土を塗った装飾性の高いものであったと思われる。



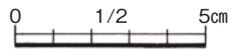
上面



裏面



9



表面

図11 塑像片9 実測図

その下方には白い化粧土上に蔓草状の彩色を施した平坦面が広がっている。彩色は被熱によって顔料が黒褐色に変質し、文様部分が盛り上がっている。

裏面には芯材の圧痕が残るが、他の塑像片とは全く異なる芯材である。幅1cm前後で軽い内反りのある細板に植物繊維を巻き付けたものを、中心部分は並行に置き、周辺部分はそれを分断するように斜行に並べるといふ、不思議な構造である。また、本片の上部には平坦面が作り出されており、そこには指の腹もしくは篠竹などで撫でたような圧痕が付いている。

この状況から当初の姿を推測するならば、本片は直径二〇〜三〇cmの円柱の一部であり、割竹の内側を外に向けた細板に植物繊維を巻き付けてドーム状の組み物としたものを芯材としていた。そしてこの円柱の上には別の部材を乗せるべく、指なし竹で撫でて平坦なプラットフォームを作り出していた、と推測される。太い円柱であれば尊像の足や腰の部材に相当するかと考えてみたが、本片には上下を貫く心木の痕跡は見当らず、またひときわ大きな突帯に適合する表現を見つけることができない。異例な芯材の様子からも、像体とは別の器材、台座などの一部と考えておくのが妥当と思われる。

つくば市発掘による塑像片〔膝付近〕(図12)

上記の辰馬考古資料館保管の塑像片とは別に、つく

ば市教育委員会によって平成三年に実施されたトレンチ調査でも塑像片が一片見つかっている（茨城県つくば市教育委員会 一九九三）。今回はその現品の実見が叶ったので併せて報告しておく。

縦九・二cm、横九・七cm、厚五・二cm

天部の膝あたりの破片と同定されており、上部が「裙」の縁、下部は袴が脛甲の上で膨らむ部分である。胎土はスサ混じりの粗土を基礎とし（粉の圧痕も見られる）、表層約5mmに精土を盛り付け、表面に白い化粧土を塗り彩色を施して仕上げている。

「裙」の彩色文様は、花卉が重層する唐花文を描いたものと見られ、彩色はすべて褐色に変化しているもの、白土の描線が花卉の輪郭を残し伝えている。なお、報告書では白色粘土の象嵌で文様を表したと記されているが、溝彫りの様子はなく、白土と顔料による彩色表現であることは間違いない。袴部分も彩色されているが、今は茶褐色一色となっている。なお、本片の彩色は厚くベタ塗りの様子であり、辰馬考古資料館保管の塑像片が白い化粧土の上に淡い文様を散らすように描いているのと対照的である。部位の違いによる塗り分けはあろうが、彩色の雰囲気の違いは印象的であった。

裏面には芯材の圧痕が明瞭に残っている。破片を縦に貫くように幅二・五cm以上、厚さ一cm以上の大きな角材の痕跡が見られ、これが脚の心木と見られる。これに直行するように幅一・二cmの横板が接続し、また幅一・五cmの縦板がその横板を押さえるように重ねられている。さらにそれらに接続しない幅一・二cmの角材が心木から離れて縦に添えられている。主材と副材を交えて立体的に組み上げた芯材の構造がうかがえる。

「裙」と袴の距離や大きさから推測すると、この天部像はおよそ

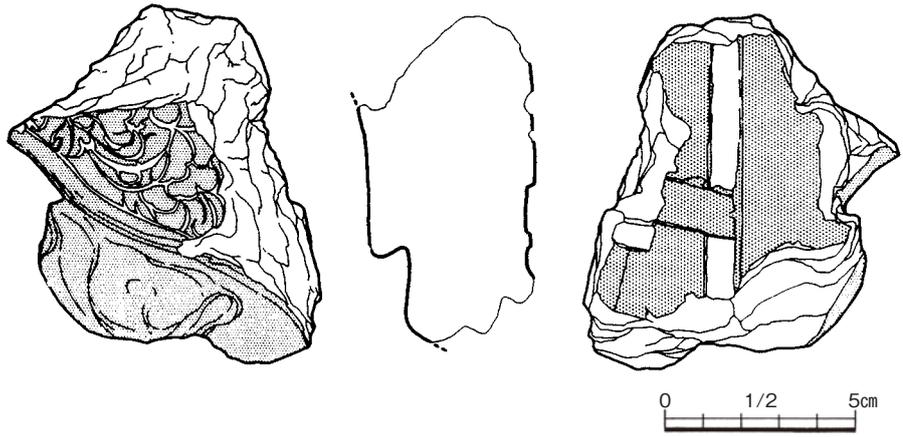
一m前後の像高であったと思われる、辰馬考古資料館保管の塑像片から推測される像とも大きな違いはなかったようである。

ところで、本片を実見して気づいた一番の特徴は、粗土の中に白雲母が一定度に混入していることであった。白雲母は筑波山南部の粘土層に特徴的に含まれる鉱物で、その有無は当地産の須恵器や土師器の指標にもされている。この白雲母の存在により、本像が地元粘土で作られたことは間違いのないところとなる。一方、辰馬考古資料館保管の塑像片にはその混入はない、もしくはほとんど気が付かない程度であったので、産地はともかくとして、別個体の塑像が存在したことになる。

報告書では本片の出土地点を明記していないが、原品に記された注記番号より、裏山池の西側、丘を背にした緩斜面（H7グリッド）より見つかったことが判明する（つくば市教育委員会石橋氏よりご教示）。辰馬考古資料館保管の塑像片の発見地とは二五〇m離れた地点であり、やはり別個体の天部像であったと考えるべきであろう。

さて、以上に紹介した想像片を本来の天部像の部位に当てはめるならば、図10のようになるであろう。胎土や彩色の様子が似ているとしても一個体になるとは限らず、実際に塑像片8、9のように像本体には還元されない破片もあり、当初にどれほどの塑像が存在したかは分からない。しかし、塑像片1に「金鎖甲」の表現があり、塑像片5のような脛甲とみられる部位があるため、これらを着装する四天王像もしくは毘沙門天像が存在したことは確実である。また塑像片2、4の大きな髷と円花文は、天部の足周りに翻る「裙」の髷とその装飾と考えるのが妥当であろう。甲や髷の大きさはほぼ同

一縮尺とみられ、塑像片1〜6のすべてを一体の天部像に収斂させることも可能である。既存の彫像との比較により、像高はおよそ一・二mであったと推測される。つくば市の発掘品も加えれば、極楽寺には塑像の天部像が少なくとも二体は存在したことになる。



表面



裏面



横側面

三、塑像の年代とその意義

次に塑像片の時期を考えてみることにしたい。日本における塑像の造立は、飛鳥から奈良時代、あるいは平安時代初期にかけて多く行われており、法隆寺五重塔の塔本塑像群や東大寺戒壇院の四天王像、同法華堂の執金剛神像など、今なお多くの作例をみることができ。一方、鎌倉時代以降における塑像の作例は極めて少なく、祖师像や仁王像などが僅かに知られているに過ぎない。概して塑像は、大陸文化を積極的に採り入れ、多様な素材で造像を試みた古代的なものと言えるかもしれない。この流れに照らした場合、鎌倉時代初期の創建とされる極楽寺に、天部の塑像が存在したのはどのように

図12 つくば市発掘による塑像片の実測図と写真
(実測図は茨城県つくば市教育委員会 1993 より縮尺を1/2に変えて引用)

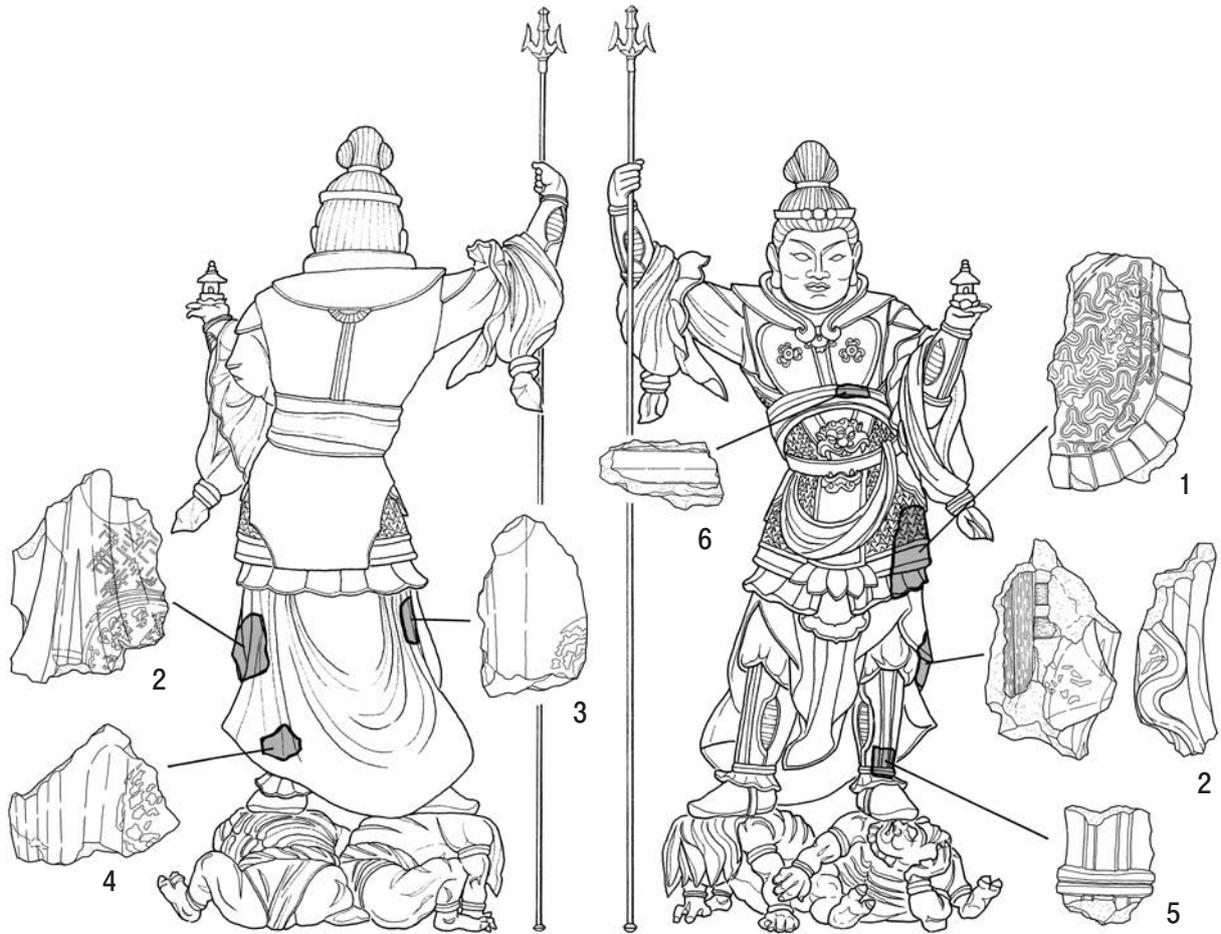


図13 塑像片の部位想定図

考えるべきであろうか。

極楽寺跡からは古代瓦は出土しておらず、またこの周辺域で奈良時代に遡る伽藍寺院は見当たらないため、前身寺院から塑像を引き継いだ可能性は排除されよう。茨城県内で塑像片が確認されているのは、極楽寺から直線距離で二七km程離れた結城廃寺（結城市）である。同寺跡から出土しているのは蓮華座に立つ如来ないし菩薩の小像であり、極楽寺の塑像とは様相が全く異なるため、これを出所と見なすことはできない。遠隔地、例えば南都から古代の塑像を運び込んだ可能性は否定できないが、発掘調査で見つかった塑像片には白雲母を含む当地の粘土が使われており、塑像を製作する仏師がいた、もしくははその技術が現地に備わっていた可能性が高い。破損の危険性を犯しながら重い塑像を遠隔地から運ぶよりも、技術をもった仏師を招聘する方が現実的であろう。以上は状況証拠ではないが、極楽寺跡の塑像片が古代のものである可能性はかなり低いとみなさなければならない。

ところで、塑像片1にはスタンプ押しによる「金鎖甲」の表現があった。塑像、木彫像を問わず、奈良時代の四天王像や神将像は小札を連ねた挂甲を着装しており、「金鎖甲」を当初から表現した（後補でなく）作例はおそらく皆無かと思われる。管見では「金鎖甲」の古い作例は東寺の木造毘沙門天立像（九世紀）である。その写しや着装を受け継いだ毘沙門天や四天王像が、平安時代後期から鎌倉時代にかけて多く造られ、天部像の甲の典型になって行ったと考えている。ちなみに、塑像片1の三叉のスタンプ文による「金鎖甲」に類

似した作例として、鎌倉・浄智寺の韋駄天立像(十四世紀)が挙げられる(奈良国立博物館二〇一四)。こちらは木彫像の表面に型押しした粘土装飾を貼り付ける「土紋」で「金鎖甲」を表したもので、完全な塑像とは異なるものの、先端が丸い三叉文を連続させ、白色の化粧土を塗った様子に近似性が感じられる。

以上より、塑像片1は奈良時代のもではあり得ず、またこれに組み合うであろう他の塑像片も古代ではなく中世の作とみるべきで、ことに鎌倉時代に始まる極楽寺の周辺で造立された可能性が高い、とまでは言うことができた。これを忍性の極楽寺止住期間にあてるか、その後の頼玄による発展期間にあてるかはその問題である。瓦窯の調査で塑像片と一緒に発見されたとされる青磁片は一見して十三世紀までは上がらないように思えたが、これも出土層位が不明であるため、塑像片の時期決定に使うことができない。あえて時期を推定するならば、一步引いて、西大寺の叡尊ら律宗による塑像の造立活動の流れに絡めて検討するのが良いかもしれない。

叡尊は南都・般若寺の本尊として周丈六の文殊菩薩騎獅像を造立している(現存せず)⁽³⁾。建長七年(一二五五)から文永四年(一二六七)に至るまで、足掛け十二年の大事業であったが、仏師善慶が途中で死亡したため、獅子座の製作は息子の善春に任された。善慶作の文殊像は楠を用いた木造であったが、善春はなぜか獅子を木骨塑像で製作している⁽⁴⁾。また、石山寺の数度にわたる修復事業の中で、弘安五年(一二八二)および同八年(一二八五)の修復は叡尊が関与したものであったという(寺島二〇〇六)。同寺に残る天平期の塑像断片には、修復に使われたとみられる質の異なる塑土が確認されるため、叡尊は木彫像のみならず塑像の修復にも協力していた可能性がある。

さらに叡尊の没後三年に発願された西大寺の文殊菩薩騎獅像(重要文化財)は、文殊像本体が木彫像でありながらその獅子は木骨塑像であり(奈良六六寺大観行会二〇〇一)、捻塑の技術が生き続けている様子が見える(叡尊十三回忌の正安四年(一二三〇二)に完成)。こうした事例以外にも、叡尊や忍性らは南都を中心とした古寺の勧進職や別当として復興に手を尽くしており、そうした事業の中で様々な素材の仏像を扱う仏師たちが育っていったことは、善春の例をみるにつけ、およそ想像されるところである。

一方、鎌倉に移った忍性の元でも塑像の造立がなされている。忍性後半生の活動拠点である鎌倉・極楽寺であるが、この寺の南門付近から仁王像のものとみられる巨大な足の指が発見されている(図14)⁽⁵⁾。塑像の右足親指で、現存長二三・五cm、爪の幅八・五cmをはかる。この大きさから、法隆寺中門の仁王像(像高約三・八m)に匹敵する巨像であったと推測される。忍性の止住期間は文永四年(一二六七)から嘉元元年(一二三三)までの三六六年間で、その間、建治元年(一二七五)の火災で堂舎壊滅の危機を経験している。この巨大な仁王像の造立時期をどこに充てるか難しい問題であるが、忍性が律寺化に奔走した入寺直後よりも、灰塵から急速な復興を果した、勢いのある時期に想定する方が良いかもしれない。十三世紀後葉頃ならば、南都で涵養されていた捻塑にも才のある仏師を借りることも容易であったかと思われる。

三村山極楽寺の塑像は、上記のように、西大寺の叡尊から鎌倉・極楽寺の忍性へと続く塑像造立の流れの中で考えると理解し易いようである。すなわち、忍性が鎌倉・極楽寺の復興に際して仏師を招聘し、これを機に東国に技術導入がなされ、三村山極楽寺の経営を



図14 鎌倉市極楽寺境内出土の塑像片

継いだ頼玄のもとで天部塑像が製作されたと推定するのである。⁽⁶⁾ 現段階ではあくまで推論の連鎖でしかなく、また西大寺流律宗が何故そこまで塑像造立にこだわったのかは不明であるが、向後の資料の増加と大方のご批正を期し、中世塑像研究の進展を願う次第である。

おわりに

今回の資料実見をご許可下さった辰馬考古資料館の上原真人館長ならびに青木政幸氏に感謝を申し上げます。また、本稿を成すにあたり多くの方々にご教示、ご支援を頂いた。以下にご芳名を掲げ、感謝の気持ちを表す次第である。

石橋充、田中密敬、寺島典人、中川満帆、根本誠二、比毛君男、山本勉（五十音順、敬称略）

注

- (1) 土浦市の等覚寺に残る梵鐘に「鑄頭極楽寺鐘」「建永」「筑後入道尊念」等の銘文があり、「尊念」すなわち八田知家が建永年間（一二〇六～七）に極楽寺の梵鐘を寄進したことが知られる。これにより極楽寺の創建を十三世紀初頭とする説が一般的である。
- (2) 高井悌三郎氏が茨城県から転出したのは昭和二十二年（一九四七）に遡る。極楽寺跡の瓦窯調査は二十日間行われたが、それは夏休みを利用して出張したものと思われる。
- (3) 般若寺の文殊菩薩騎獅像の造立については『金剛仏子観尊感身学正記』に詳しいが、本像が周丈六の大きさであったことは「般若寺文殊縁起等」（康暦元年（一二七九）、般若寺蔵）に「奉造立 文殊師利菩薩形像一軀周丈六」と明記されている（奈良国立博物館 二〇一六）。
- (4) 『金剛仏子観尊感身学正記』弘長三年条に「造師子 以木為骨 以土作肉」とある。
- (5) 本破片の横には「極楽寺本堂南出土」と注記されており、またこれを収めたボール箱には「昭和五十年五月六日／赤星直忠氏より奉納さる／佛足の指／昭和年間極楽寺境内より発見」と記した紙が貼られている。本破片は被熱によって硬く焼き締まっており、芯の粗土は黒化している。表面の化粧土には細かな「キラ」と呼ばれる微細な雲母片が含まれていた。実見にあたっては鎌倉・極楽寺の田中密敬住職に特別のほからいを頂いた。
- (6) 三村山極楽寺跡の近くに鎌倉時代後期の作とされる毘沙門天種子板碑が存在する（つくば市北条）。雲母片岩を用いた高一七〇cmの板碑で、毘沙門天の種子を流麗な書体で刻んでいる（つくば市指定文化財）。極楽寺の天部塑像との関係は不明であるが、同じ頃に当地に毘沙門天信仰がみられることは興味深い。

参考・引用文献

- 茨城県つくば市教育委員会 一九九三 『三村山極楽寺跡遺跡群―確認調査報告書―』
- 佐藤有希子 二〇二二 『毘沙門天像の成立と展開』 中央公論美術出版
- 高井悌三郎 一九六四 『三村山拾遺』 『郷土文化』 第五号 茨城県郷土文化研究会
- 高井悌三郎 一九五七 『茨城県筑波郡三村山瓦窯址』 『日本考古学年報五昭』

- 和二七年度」日本考古学協会
- 高井佛三郎 一九七九 「常陸・下野の中世瓦瞥見―常陸三村山瓦窯跡出土瓦の二、三を中心に―」『茨城県史研究』第四三号 茨城県史編集委員会
- 筑波町史編纂専門委員会 一九八九 『筑波町史 上巻』
- 寺島典人 二〇〇六 「石山寺境内遺跡出土塑像の概要」『石山寺境内遺跡発掘調査報告書』 大津市教育委員会
- 奈良国立博物館 二〇一四 『鎌倉の仏像―迫真とエキゾチシズム―』
- 奈良国立博物館 二〇一六 『忍性―救済に捧げた生涯―』
- 奈良国立博物館 二〇二〇 『毘沙門天―北方鎮護のカミ―』
- 奈良国立文化財研究所監修 一九七七 『西大寺観尊傳記集成』 法蔵館
- 奈良六六寺大観刊行会 二〇〇一 『奈良六六寺大観 補訂版 第十四卷 西大寺』 岩波書店
- 西川杏太郎 二〇〇〇 『日本彫刻史論叢』 中央公論美術出版
- 比毛君男・広瀬季一郎・越田真太郎・野内智一郎 二〇二三 「古代末から中世の瓦」『瓦から読み解く古代社会の諸相―基礎資料の集成と分析―』 茨城県考古学協会
- 藤田清・中村盛吉 一九七二 『常陸古文化研究』
- 松尾剛次 二〇〇四 『忍性―慈悲に過ギター』 ミネルヴァ書房
- 和島芳男 一九七二 「常陸三村寺と忍性」『金澤文庫研究』第一八巻第七号
- 神奈川県立金沢文庫

(よしざわ さとる／奈良国立博物館学芸部長)

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雑集

第二十六号

令和六年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630-8233

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社

天理市稲葉町八〇番地